



境界あれこれ

9

～ スクール・カーストという境界 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

はじめに

大学生の授業を担当している中で、毎回小レポートを書いてもらう。学生さんたちに自分の子ども時代を振り返る意味で、小学校、中学校、高校時代の自分のことを書いてもらう。その中で、「私はクラスのカーストで下の方にいたので・・・」とか「カーストが嫌だった」等と書かれているのを見るのが何度かあり、スクールカーストを今回のテーマにしてみた。

「カースト」とは？

そもそも「カースト」とは何か？

「カースト」とは、ヒンドゥー教における身分制度（ヴァルナとジャーティ）を指す言葉で、ポルトガル語の血統を意味する「カスト」が語源とされる。ジャーティとは「生まれ」「家柄」という意味であり、ヴァルナは「種姓」。

そもそもは、紀元 1500 年ごろにアーリア人がインドに移住する時に、征服層が三つのヴァルナを作り、先住民であるトラヴィタ人を当初の下位のヴァルナとしたことがキッカケであると言われている。その際の社会階層概念では、バラモン（司祭階層）、クシャトリア（王族・武人階層）、バイシャ（庶民階層）、シュードラ（上の階層に奉仕する階層）の四つからなっていた。但し、その下にも被差別民（賤民）の様々な集団も存在し、その代表的なものはチャンダーラである。しかし、有名な古典法典である『マヌ法典』では、第五のヴァルナは存在しないとし、これらの被差別民諸集団を社会の正規の構成員として扱っていない。（図1、2参照）

四つの階層については、インド最古の文献『リグ・ベータ』の中の「原人の歌（プルシャ・スークタ）」で、原人の頭からバラモンが、腕からクシャトリアが、腿からバイシャが、足からシュードラが生まれたとされている。

現在のインドでは、地域差があるようで、場所

図1 <原型>

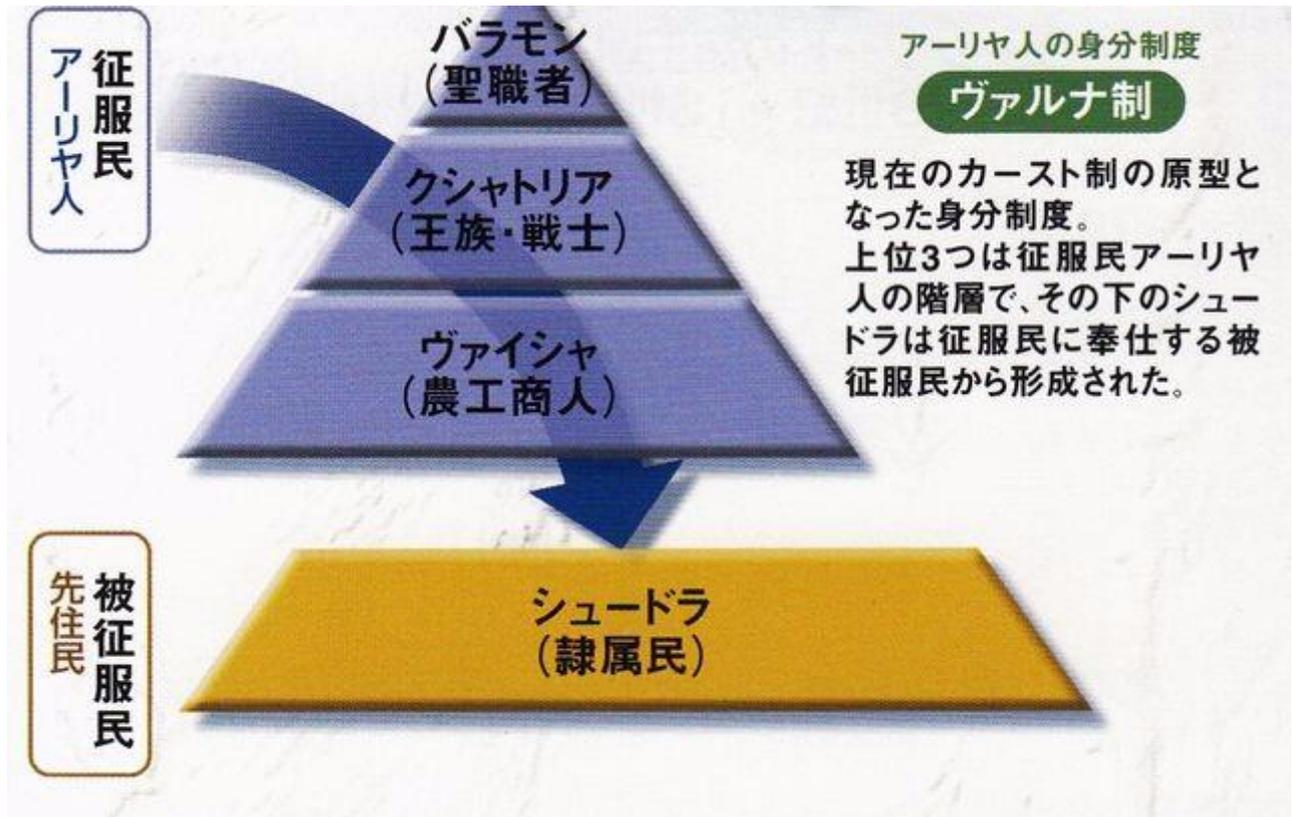
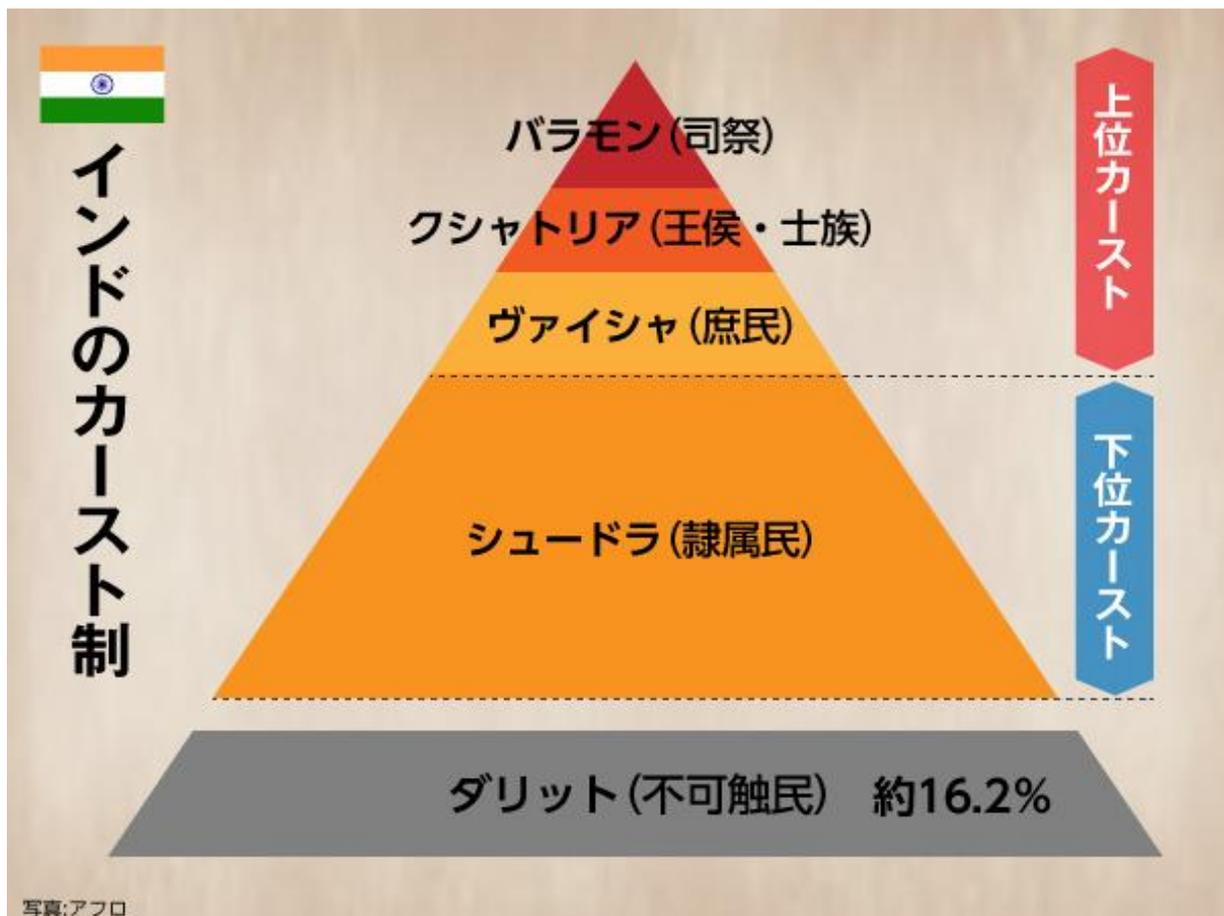


図2 <その後のカースト制度>



によっては今もカースト制度を重視し、親の仕事が子どもの仕事になるとされ、そこから抜け出ることが出来ないということもあるようだが、古き悪しき制度を意識しなくなっている地域もある。また、IT 関連の仕事はカーストの中になく新しい職業であるため、カーストの影響を受けないとされている。それ故、インドの IT 関連は盛んなのかもしれない。

「スクールカースト」

では、スクールカーストとは一体どのようなものなのか？

調べてみると、元々はアメリカ合衆国の主に高校で始まった階級意識と差別に由来するようだ。

アメフトなど、スポーツで活躍する筋肉質系で持てる男子生徒がトップのジョックと呼ばれ、女子はジョックの取り巻きともいわれるチアガールなどから、特に美人でトップになるような女子高生がクイーン・ビーと呼ばれる。

勉強はできない子たちが多く、この子たちと対抗する形で、ナードと呼ばれる、勉強が出来るがスポーツは苦手な子どもたちなどがある。

ジョックやクイーン・ビーは、いわゆるオタク系の子やナード、或いは LGBT の子どもたちをいじめの対象とすることも多い。しかし社会に出ると、ナードの方が成功しており、階層としては逆転してしまうようである。社会で成功する多くの方はナード出身であると言われている。

アメリカでこのようなスクール・カーストがあるなら、日本にもあるのではないかということから、ネットで急速に広まったのが日本のスクール・カーストだと言われている。

東京大学社会学研究所の研究者・鈴木翔氏によると、日本の中学校および高校の教室に「スクール・カースト」があるという。

クラスの「上中下の順位」は・・・

「上」…容姿にすぐれている、運動能力が高い（ここまではアメリカの場合と一緒に）、話が面白い、ノリがいい、異性受けが良いなどコミュニケーション能力の高い人物

「中」…「上」の人間ほどではないが、そこそこコミュニケーション能力がある。

「下」…おとなしくて、目立たないタイプ。コミュニケーション能力が低く、話下手。

ということのようだ。

この「下」に入ってしまうであろうタイプには発達障がいの子もたちが多く含まれるであろうことは容易に想像がつく。

図4のように、「スクールカースト」では、「運動部所属者」の方が「文化部所属者」より序列が上であり、親の経済状況も子どものカーストに影響を与えているのがわかる。そして、最下位に位置する子どもたちは、いじめの対象とされる。

スクール・カーストの実態とは・・・

・クラス内の面倒くさい仕事やきつい仕事（例えば冬の雑巾がけなど）は基本「下」の子どもたちがさせられる。

・女子高生では、「下」の生徒は目をつけられないようにと化粧をしない。

・クラス替えが行われ「キャラ変(キャラの変更)」をしようとしても、情報がすでに学年全体で共有されているため、序列逆転はできない。

・一生懸命努力する＝カッコ悪いという意識があり、「イメージチェンジ」に必死になる姿は嘲笑的となる。

・上位の生徒の一言で下位の子のランクがさらに下がる。「下位グループ」にも「(下の)一軍、二軍、三軍」がある。すなわち、教室内の階級付けは上位の子が決めることになる。

・リアルタイムブログなどの日記も「閲覧を許される人」と「閲覧できない人」に分けられ、定期的にパスワードが変更されても、教えてもらえな

図3 <アメリカのスクール・カースト>

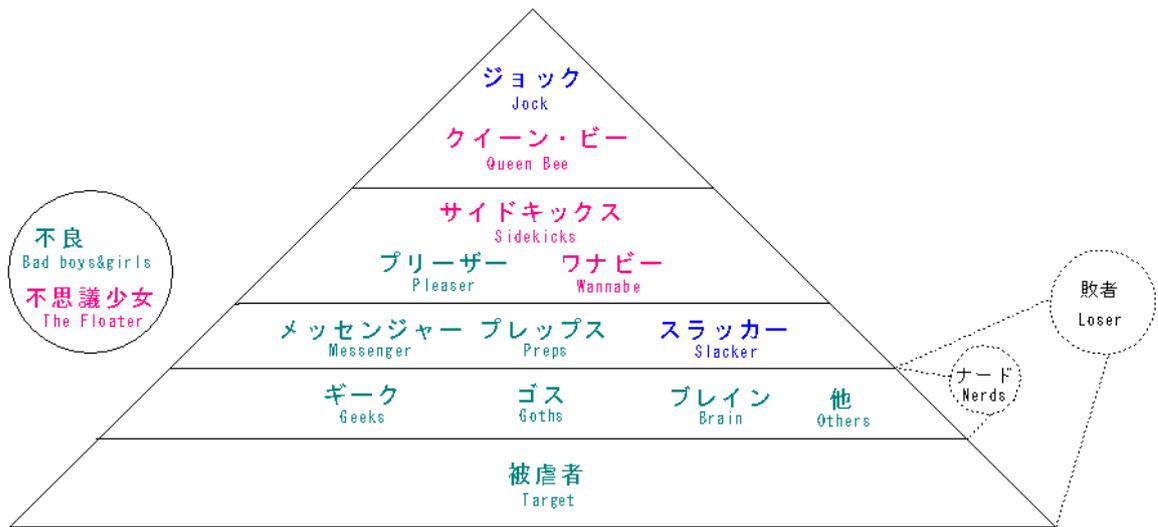
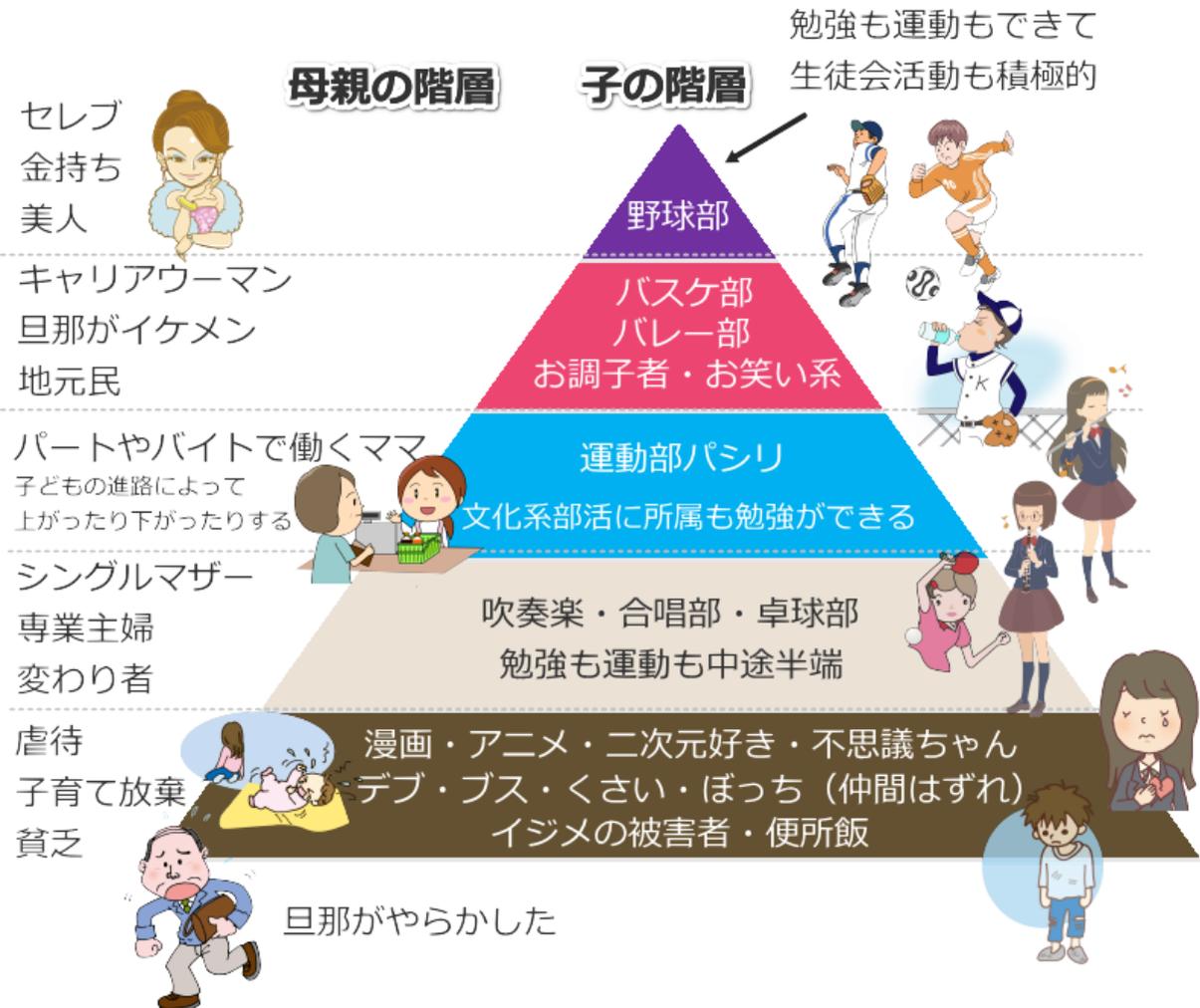


図4 <日本におけるスクール・カースト>



い場合がある。今まで閲覧できていた「普通」の「リアルに鍵をかけられる」というのだそうだ。

- ・女子生徒の多くが持つ「プロフィール帳(自己紹介などを書き込めるノート)」を巡って、「上」の生徒が「下」の生徒に「書いて」と頼み、その子は嬉しそうに書き込んだ所で「上」の生徒がそれをゴミ箱に捨てて、教室全体で笑いものにしたりする。

このような行為は、書き込んだ子の自尊心を酷く傷つけるのだが、他の子の笑いを誘うことから、全く悪気がない。時折、こうした行為の主導権を握る「上」の子は自らを「正義」と思い込んでいたりする。

- ・「上」の生徒にも義務はあるようだ。

「権力」を持っているがゆえに、ホームルームなどでみんながだまって何も言わないと「上」の人間が何か発言しなければならない。教師に対する悪い態度を敢えて率先して取っていかなければならないこともあるそうだ。例えば、「ばっかじゃないの」とか「チョーむかつく」的な発言。

- ・上位にすることで、誰にもいじめられないという安心感がある。

子どもたちのこうしたカーストに先生たちは気づいているのだろうか？

気づいている先生も気づいていない先生もいるようだが、最悪はクラス・カーストに先生も同調してしまった場合である。

30年以上前の話であるが、中学2年生の男子が自殺した。学校で「葬式ごっこ」といういじめがあって、そのいじめに先生も加担していたという事件があった。当時はスクール・カーストというものはなかったが、この生徒は使いっ走りであったことを考えると、今でいうスクール・カーストの一番下位に居たことになる。

先生がそれに気づかないというのは悲しい話である。場合によっては先生が、上位の生徒をひいきし、「中」や「下」の子どもたちから文句が出ることもある。スクール・カウンセラーとして働いていて、上位とされている子が如何に裏で陰

生徒は「下」に身分が下がったとわかる。これを湿ないじめをしているかに気づくことがあるが、そういう時いくら先生に話しても、「あの子はそんな子ではない」と表面の良さに騙されていることも時折あるのは事実だ。

いじめによる事件はマツト死や川崎の川で亡くなったお子さんなど、中々後を絶たないが、カーストそのものがある限りいじめはなくならないだろう。

なぜこのようなものができたのだろう？

いじめは昔からあった。「勉強ができる子」「先生の子」「ケンカが強い子」「運動が得意な子」など、一目置かれる子は昔もいた。筆者が子どもの頃は、経済的に豊かな子と貧しい子の差も大きく、着ているものも違った。しかし、筆者の子どもたちの時代には、家が貧しいかどうかは分かりづらくなった。

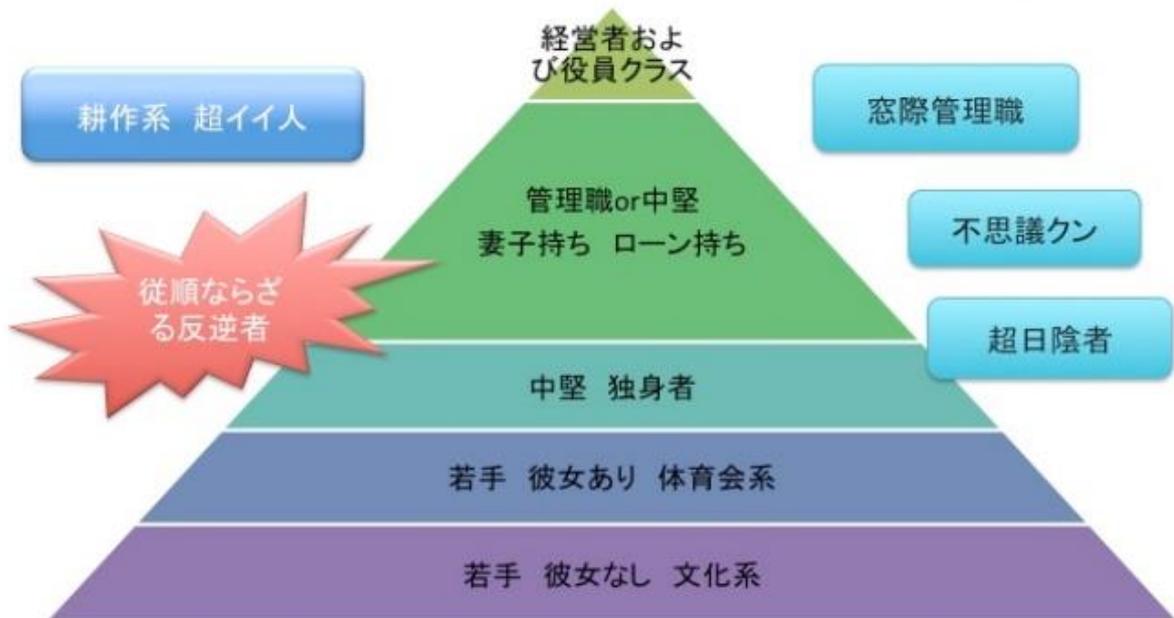
世の中では、日本航空の倒産など大会社の倒産が続いた時代があり、「寄らば大樹」という考え方が通用しなくなった。それは、日本社会全体、大人たちの間に厭世感や絶望感を与えた。そんな時代に生まれた子どもたちが、丁度大きくなったころにスクール・カーストが発現した。これは必ずしも偶然の一致として片づけられないのではないか？

ここ10年、子どもたちは、人と摩擦を起こさないように、子どもたちの中で目立たないようにと息をひそめて生きるようになってきたと感じる。喧嘩もしないし、比較的良い子だが、覇気もなく、存在感も薄い子が増えた。こういう子どもたちはスクール・カーストでは下位に位置する。前述の鈴木氏は『勉強ができていい大学に入っても就職がおぼつかない時代になったため、生徒にとって価値ある能力が分散して見えづらくなった』こと、教育現場でも「生きる力」「人間力」「問題解決能力」といった「社会を生き抜くための力」とされるきわめて曖昧なものが重視される

<図5 社会にみられるカースト>

社畜カーストピラミッド

製造業男社会のケース



ようになったことを、こうしたカーストが生まれた要因として捉えている。

こうしたカーストは子どもたちの間だけにあるわけではないようだ。カーストの図を調べていたときに次のようなものも見つけた。

いじめにしても、差別にしても、大人の世界にあるなら、子どもの世界にないはずがない。子どもは大人を見て育つ。インターネットやテレビから情報を得ている子どもたちの世界には、様々な差別問題、障がい者への不当な扱い、大人同士のいじめの情報が蔓延している。こんな状況で、いじめや差別が無くなるはずはないのである。

まとめ

スクール・カーストにおける境界は明白で、境

界をはっきりすることで、自分の位置を明確化し、かつ安定化しようとしているようである。それでいて、いつ下の階層に落ちるかわからないという不安の中で、戦々恐々としてもいる。

「こんなバカなことにエネルギーを使っていないで、もっと生産的なことをしよう！」と勇気ある一言を、それこそ上位に位置する子が言えば、少しは変わるのだろうか？

2020年に小学校、2021年に中学校で新しい学習指導要領に基づく教育がはじまる。今回の改定では「生きて働く知識、技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」が新しい時代に必要となる資質・能力の育成として挙げられている。そしてそのためには、教科教育、道徳・特別活動、生徒指導・キャリア教育を統合して、「子どもを育てる」「児童が自分の特徴に気づき、良いところを伸ばし、自己肯定感を持ちながら、

日々の学校生活を送ることができるようにする」という共通目標を掲げている。

学習指導要領は何度となく改定されてきた。その結果、学校は本当によくなっているのだろうか？子どもたちは学校を好きになっているのだろうか？子どもたちの学校生活は楽しいのだろうか？

運動ができるとか勉強ができるとかのステレオタイプの「優等生」だけが「優れている」と思われがちな学校において、個性を認め合い、それぞれの良いところを見出すような意識が全体に根付くことが、こうした差別や区別の問題の唯一の解決策だろう。そのためには教育の場だけではなく、受験・就職の評価指標を変える必要もあるだろう。

子どもを育てるために、まず社会が変わらないと何も変わらないのではないか。

本家本元のカースト制度も、人権の問題などから非難を浴び、徐々に消滅しつつある今の時代に、

なぜ遠く離れたアメリカに追随する形で日本にこんなものが入ったのか。江戸時代の土農工商の身分制度と変わらない、或いはそれより酷いスクール・カースト。チーム学校も大いに結構だが、文明開化を起こせるような、勇気ある子どもたちを育てるためには、社会の我々大人たちの評価基準に疑問を投げかけ、社会全体の変革を進め、同時に教育場面での個性を尊重する意識の育成が必要だろう。スクール・カーストについて書いていて、そんなことを思った。

参考文献

- ・図1～5 bing.com/images スクールカーストの画像
- ・鈴木翔（2012） 「教室内(スクール)カースト」 光文社
- ・新しい学習指導要領 中央教育審議会,2017